

研究区分	教員特別研究推進（教育推進）
------	----------------

研 究 テーマ	幼児期における子どもの「語り」の言語学的分析				
研究組織	代 表 者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	田村 敏広
	研究協力者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発 表 者	所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	田村 敏広

講演題目
幼児期における子どもの「語り」の言語学的分析
研究の目的、成果及び今後の展望 本研究は、幼児期における語りの習得過程に着目し、「語りという高度な言語行為の習得に対して、言語環境がいかなる影響を及ぼすのか」という問題を中心課題として設定したものである。幼児の語りは、自己の体験を語るパーソナルナラティブと、物語を創作・再生するフィクショナルナラティブの二種類に区別される。本研究では、これらの語りの習得において、絵本というメディアがどのような言語環境を提供しているのかを明らかにすることを目的とした。 具体的には、①幼児期の子どもに見られる語りの言語的特徴の解明、②絵本において用いられる語りの言語的特徴の解明、③絵本の語りが子どもの語りに及ぼす影響の検証、の三点を研究課題として設定し、段階的に研究を進めた。 本研究の特色は、語りという高度な言語行為の習得に関与する具体的な言語環境を、経験基盤主義的観点から解明しようとする点にある。従来の研究が初期的な言語発達に主に焦点を当ててきたのに対し、本研究は談話レベルに対象を拡張し、環境要因の役割を検討する。また、絵本に着目し、文末表現、接続表現、構文、談話構造といった言語形式との対応関係に基づき、子どもの語りとの関連性を明らかにする点にも特色がある。 研究は三段階で実施した。第一段階では、こども園等におけるフィールドワークにより幼児の語りの言語的特徴を明らかにした。第二段階では、物語絵本を対象とした分析により、文体、接続表現、談話構造の特徴を抽出した。第三段階では、観察および実験的手法により、子どもの語りとの対応関係を検証した。 以上の研究を通じて、幼児の語りに見られる言語的特徴の一部は、絵本における語りの形式を基盤として形成されている可能性が示唆された。特に、フィクショナルナラティブにおける丁寧体の使用に着目した分析から、幼児期の子どもは物語絵本の語りから文体的影響を受け、その形式を参照していることが明らかとなった。フィクショナルナラティブでは丁寧体が観察される一方で、パーソナルナラティブでは出現しにくい傾向は、絵本の語りの影響と、丁寧体に関する言語知識が発達途上であり揺らぎを伴うことを示していると考えられる。また、幼児期の子どもは単なる模倣にとどまらず、丁寧体の使用を他者意識と結びつけ始めている可能性も示唆された。これらの知見は、言語習得において実際の言語使用経験を重視する経験基盤主義的観点を支持するものである。 以上より、絵本は幼児期の子どもにとって単なる娯楽的媒体ではなく、談話レベルの言語能力の発達に寄与する重要な言語環境であることが具体的に裏付けられた。今後は、多様な言語環境との比較や、読み聞かせといった言語使用場面に着目し、発達段階に応じた影響の差異を含めて検討を進めることで、本研究の知見をさらに精緻化していく必要がある。